

HIMALAYA

ヒマラヤ
No.392



2004 JUL



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

日本ヒマラヤ協会

HAJ

2005年HAJサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1. 期間：2005年7月15日(金)～8月22日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しません。隊員による自力登山です。

チベット カンペンチン(7,281m)

シシャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰(北峰)を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1. 期間：2005年7月23日～8月28日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切：定員になり次第
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。

表紙写真

横断山脈の核心部、深い浸食の国の秘峰・伯舒拉嶺 木孔雪山
6,005m東面。梅里雪山巡礼路から撮る。2003年10月。

(文と写真：中村 保)

ヒマラヤ No. 392

1. 東南チベット・イラワジ川源流から雲南へ(2) 中村 保
12. 20世紀・日本ヒマラヤ登山のまとめ6 マカルー入山者
14. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス〉
16. エベレスト高齢登頂トップ38
17. 平成16年 日本ヒマラヤ協会通常総会報告
24. 事務局日誌

東南チベット・イラワジ川源流から雲南へ(2)

—偉大な探検家F. M. ベイリーの足跡をたどる—

2003年10月

中村 保

陸の孤島—日東、秘峰・木孔雪山

知らない土地について抱くイメージは外れることが多い。日東がそうだ。車道の終点から馬のキャラバンで5日、しかも人民解放軍の辺境防衛部隊の駐屯所が配置され監視の目が厳しい。谷深いところにある陰鬱な村だろうと想像していたが、そうではなかった。イラワジ川の源流部の一つ、日東河右岸の明るい広大な段丘の上に上日東、下日東の村がある。二つの集落を合わせ28家族、170人が住んでいる。行政的には察隅県竹巴根郷の管轄下にある。畑は広く大麦、小麦が栽培され、森林資源も豊富である。木造の民家もしっかりしている。段丘の下を流れる日東河は青い清流と樅の木が調和して絵のような風景をつくっている。対岸の上に小さなラマ寺がある。

ベイリーは日東で一泊したが印象は悪かったようだ。ミルクや羊を買うことを断られ、馬の餌の調達も難しかったので、住民は非協力的だと記しているだけである。

一番気にかかったのが1993年にアメリカ人たちが拘束された解放軍の駐屯所である。泊まる家の主に聞いたところ、その事件は有名であり村人は皆知っている、その後外国人は誰もきていないという。ベイリー、アメリカ人たちについて我々は三番目ということになる。

下日東まで下って恐るおそる駐屯所を見ることにする。呼びとめられ尋問をうける。通訳の喬さんが連れてゆかれ、相当時間がたってから戻ってきた。喬さんが咄嗟に広東省からきた客を案内していると言ってなんとか取り繕ったが、翌朝出発する前に責任者の陳さんと一緒にもう一度出頭せよと命じられた。ここには10人の兵隊が駐屯している。漢族、チベット族、白族、納西族、満州族の混成部隊で

ある。若い兵士たちは2年の任期を早く終えて故郷に帰れる日を待ちわびている。

日東から西へ3日で独龍江本流の吉太に行ける。キングドン・ウォードがビルマから国境のナムニ・ラを越えて来たところである。吉太にも解放軍の駐屯所があり、ここには外国人のみならず、中国人も特別の許可がないと近づけないという。ミャンマー国境への接近は断念せざるを得なかった。

10月17日、快晴、朝8時 2℃。泊まった家の主が馬方として門空までキャラバンをリードする。日東の馬10頭、馬方2人に桑久から来た達珠が馬方として同行する。下日東で駐屯所に陳さんと喬さんが出頭するが、べつだん問題はなかった。昨日は私のことを広東省からきた人と言ったが、すでにバレていた。村人の口コミで日本人が来たという情報が駐屯所にも届いていた。陳さんが通行許可を持っていたので事無きをえた。日東河左岸の段丘を道は緩やかに下る。昼前に斎馬拉(4,710m)に向かう支流との合流点(3,450m)に着く。イラワジのメイン・ストリームとはここでお別れである。

門空への街道は放牧小屋(3,890m)のところまで樹林帯の溪谷沿いに上る。大勢の巡礼のグループが次つぎに下りてくる。チンコー酒を水筒やペット



▲日東谷風景

ボトルに入れて持ち、飲みながら歩いている。すれ違うたびに我々にすすめる。私のことを「老朋友」と慕ってくれる気のいい達珠は飲み過ぎてふらふらになる。放牧小屋から遥か高みにある険しそうな齋馬拉を見上げて戦意喪失、もうあそこまでは登れないと泣き言をいう。可哀相だが帰ってもらうことにした。徒渉するときは平気で水の中に入り馬を安全にリードしてくれるなど、よく面倒をみてくれた。「有難う達珠。必ず写真を送るよ。再見。また察隅で会おう」

齋馬拉の西側は険しい登りで、横断ルート中で一番の難所である。急な岩と灌木の斜面に道が弱点を選んでジグザグにつけられている。馬にとっては厳しい。雪が降れば通れなくなるだろう。天気のいいうちに峠に立ち、秘峰、木孔雪山6,005mを写真に収めようとキャラバンを急がせ、午後4時40分に峠に着いたが、木孔山塊はすでに雲の中だった。遠く東に梅里雪山のPK6509が見えただけだった。落胆する。

齋馬拉はイラワジ・サルウィン分水嶺である。これから「深い浸食の国」の核心部の横断が始まる。ベイリーの観察を引用する。

「(齋馬拉の)峠の高さは4,755mだった。悪天候と信頼に足らぬ情報のため、No LaかTsema Laのいずれがサルウィン・イラワジ分水嶺を確定することはできない。二つの峠の間で私が横切った流れはJahaという場所を通して北に流れ、やがて概ね東西に横たわる谷に合流することがTsema Laから

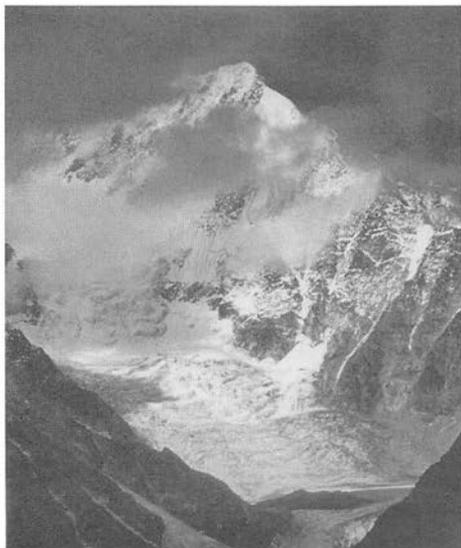
▼日東村と人民解放軍駐屯所



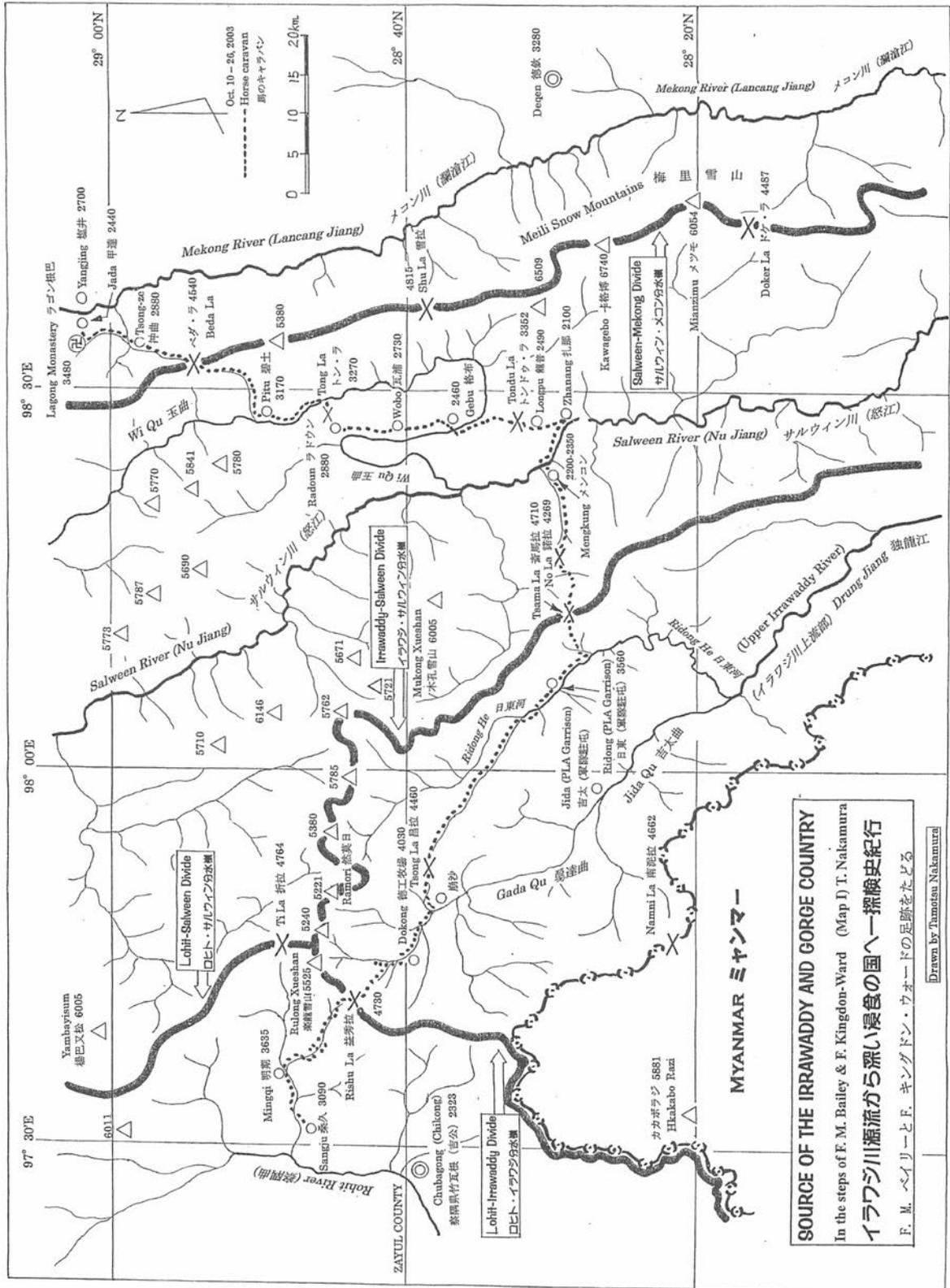
見えた。私は川そのものを見ることはできなかったし、村人はその川が東に流れてサルウィンに注ぐのか、或いは西に流れイラワジに注ぐのか、私に言うことはできなかった。しかし、Tsema LaがTsarong地方の西の境界であり、Drogong地方の境界なので、Tsema Laは主稜線上にあり、この川はイラワジに流れ込んでいる可能性が最も高いと判断する。バコーの地図は役に立たない。多分天気が悪かったのだろう。」齋馬拉をイラワジ・サルウィン分水嶺上にあるとしたのは正しいが、残念ながら、ベイリーの言う川はイラワジではなくサルウィンに注いでいる。

10月18日、谷間の湿気の多いキャンプ地(4,020m)から暫く溪谷を下って、樹林帯を急登し、二つ目の峠、諾拉(4,269m)を越える。峠には巡礼の一行が休んでいる。西を振りかえると齋馬拉の5,000m前後の稜線が雲に霞んで見える。ペリーがイラワジに至るだろうとほぼ確信した東西に延びる谷は、諾拉の北の尾根から俯瞰するかぎり、西側が齋馬拉から北西に連なる山稜に遮られてイラワジへの出口はない。ベイリーのときは視界が利かなかったのだろう。

木孔雪山の北面氷河の末端だけが見える。規模の大きい山塊である。何としても山の姿を捉えたい。2時間粘る。不完全ではあるが、一瞬の晴れ間に主峰の頂上部分と直下の氷河を写真に撮ることができた。木孔雪山は土地の人たちにはよく知られているが、外界にとっては伯舒拉嶺の秘峰である。二つの鋭峰をとりまく大きな氷河が発達している。この山塊だけを偵察にくる価値は十分あると思う。翌19日の昼に門空に着き、チベット族の家に二晩やっかいになる。キャラバンの第二幕は無事終わる。



◀ ノ・ラから見た木孔雪山南面



MYANMAR ミヤンマー

SOURCE OF THE IRRAWADDY AND GORGE COUNTRY
 In the steps of F. M. Bailey & F. Kingdon-Ward (Map I) T. Nakamura
イラワディ川源流から深い峡谷の国へー探検史紀行
 F. M. ベイリーと F. キングドン・ワードの足跡をたどる

Drawn by Tsumatsu Nakamura

憧憬のツァワロン—門空にて

門空はサルウィン(怒江)の右岸の200mほど上、標高2,200—2,350mの段丘にある歴史ある要衝の地である。古くからツァワロン地方の中心であり、また中国とチベットとの攻防で橋頭堡でもあった。「ツァワ」は暖かいを意味する。サルウィン峡谷沿いは温暖で狭い段丘ではあっても農耕が可能で豊かな土地である。大麦、小麦、玉蜀黍、胡桃、柘榴、杏、林檎が実る。家畜は牛、ヤク、馬、羊に加え豚、鶏も多い。

ベイリーが門空を発った2日後にキングドン・ウォードがやってきた。ベイリーは後年キングドン・ウォードの紀行『青いケシの国』を読んでそのことを知る。探検史に残るエピソードの一つである。キングドン・ウォードは1913年に再び門空を訪れようと扎那でねばったが、中国人の使節に拒絶され果たせなかつた。チベット圏ではありながら独特の文化と社会制度を育ててきたツァワロンへのキングドン・ウォードの想いは強い。ツァワロンの往時を伝える彼の1913年の観察を引用する。

「サルウィン(怒江)を中国の侵攻から守ることは、チベットにとって最も重要な戦略の一つである。そのためには、ツァワロンを通過してラサに通じる交易路を支配しなければならない。一つは玉曲を辿り北の左貢にいたる道、もう一つは門空から察隅に通じる街道である。」

「彼ら(カム地方のチベット族)は優れた道路、立派な家屋、良質で多様な食べ物、衣服、装飾品を持っている。人々は知的で法律を守り、勤勉で寛容、そして宗教心が厚い。男は体力があり、女



▲陸の孤島メンコン村とサルウィン川

性は美しい。ツァワロンでは乞食も泥棒もいない。チベットの他の土地のように、農民の生き血を絞るような搾取をする巨大な僧院によって禍をもたらされているところではない。」

「ツァワロンに戻って私は自問自答した。「カムの人たちはこの過酷な風土のなかで、かくも洗練された文明と生活環境をつくりえたのだろうか」。見つけた答えは“彼らは偉大な旅行者であり、目指す地平線に果てるところはない”ということであった。交易のために中国へ行き、信仰のためにチベットを西に旅する。中国、インド、そしてビルマにおいてさえその文明を見聞し、人々と交流し、交易を通じて新しい情報を持ち帰る。彼らはまた高僧を崇拝し、ラサに行き聖地を巡礼する。遊牧民の本能を失うことなく、農耕生活に定着した人々である。こうしたツァワロンの文明様式が生まれた背景には、交易や宗教よりもより基本的な社会構造があるに違いない。ある人の説だが、サルウィン峡谷の上流域や察隅、波密地方に広まっている奴隷制度である。」

「奴隷制度が人々にもたらす大きな恩恵、利益は余暇である。奴隷に仕事をやらせることにより農民や遊牧民は宗教的瞑想の時間を得る。瞑想によって宗教、倫理、正義感の抽象的思考が発達する。余暇ができれば交易も可能となる。」(F.Kingdon-Ward *The Mystery River of Tibet* London 1923)

ベイリーは奴隷制度について書いている。

「門空はかつては奴隷貿易のセンターであった。背丈の低い種族(たぶんNung族)をたくさん見つけた。門空から7日ほど南に行ったチベット族がTsong Yulと呼ぶ土地から連れてこられた。エドガーが典型的なタイプの奴隷を測ったみた。男は4フィート8インチ、女は4フィート4インチだった。一人の女は顔に刺青をしていた。中国が門空を占領したとき、漢族の奴隷・男13人と女3人がいたが、すぐ解放された。しかし、漢族以外の奴隷は継続して使うことを許された。」門空でエドガーはベイリーと別れて宣教活動のため巴塘に帰った。数ヶ月後に辛亥革命が起り、辺境も不穏な情勢になった。

我々は1日休養し、近在を探訪する。門空はツァ

ワロンでは大きい段丘の上であり、畑はよく耕され、灌漑・上水の水路も整備されていて歴史を感じさせる。簡易水道も引かれている。水力を利用した小さな発電所もある。カム地方に共通する住居構造だが、家畜を収容する1階は堆肥をつくる場所でもある。堆肥は小石まじりの畑に丁寧に撒かれる。人間の大便は豚がきれいに掃除してくれる。すべてが無駄なく循環し、生態系が昔ながらに維持されている。人々は老若男女皆明るくて人懐こい。親切である。朝方路地を散歩していると畑に行く人が挨拶の声をかけてくれる。村外れの高いところにラマ僧院がある。キングドン・ウォードの頃の美風が今に残っている。嬉しい。振り返ると梅里雪山第二高峰PK6509の西壁がサルウィン峡谷を睥睨し、純白のヒマラヤ巒がまぶしく輝いている。先ずお世話になった家の42歳の主から話を聞いた。要約する。

1. 生 計：農業が中心。それに冬虫夏草など漢方薬の薬草と松茸。
2. 収入源：一番多いのは馬4頭の荷駄賃。薬草と松茸は季節的。馬で運ぶ荷物は日

用品、おもに塩井、丙中洛に輸送するが、日東へ運ぶこともある。

3. 人 口：100家族以上、1,700人ぐらい。
4. 学 校：6年制の小学校。生徒は150人上。門空村の子供は全員学校に通っている。中学は察隅・吉公に行く。進学率は5人に1人。

ハイライトは長老とのインタビューだった。陳さんに頼んで調べてもらったところツァワロンで一番年寄の107歳のお爺さんが生きていることが分かった。家の主に案内してもらいラマ僧院の近くにある家に行って上げてもらう。107歳ではなく、ちょうど百歳だったが記憶はしっかりしている。名前は白馬さん。チンコー酒を蒸留している居間で話を聞かせてもらった。

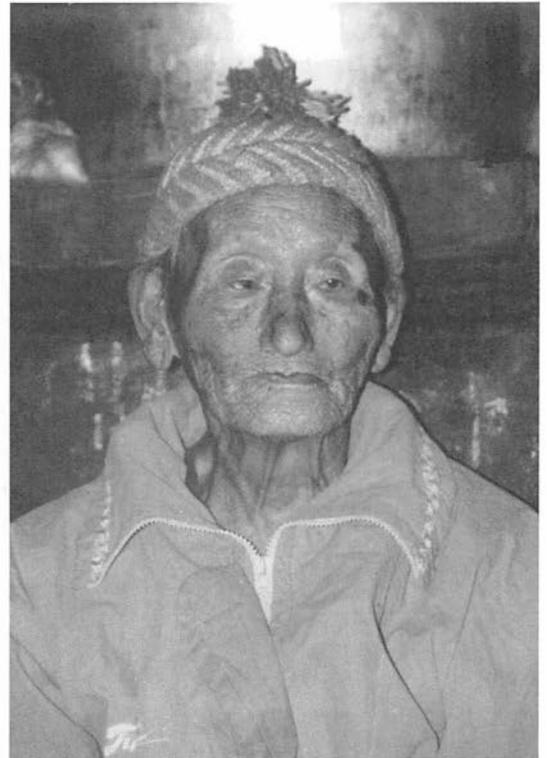
中村：何人の子供さん、お孫さんをお持ちでしょうか。

老人：子供は6人の娘です。孫は27人、5代目までいますが、曾孫以降は数えられません。

中村：若い頃に外国人と会ったことがありますか。
(バイリーやキングドン・ウォードのこと



▲メンコン村の女性



▲メンコンの100歳の白馬（ペマ）さん

▼メンコン村のチベット人の家



を知っているかと期待しての質問)

老人：外国人が門空に來たと聞いたことはあるが、自分は見ていません。

中村：遠くへ旅をしたことがありますか。何処へ行きましたか。

老人：20代に山西省の聖地・五台山とインドにあるチベット族聖地「猿の山」に行きました。カリンボンの近くで、ラサ経由で行きました。インドへ旅したのは1回だけです。目的は聖地巡礼と商売の両方です。門空のラマ僧院の活仏に命令されて出かけました。商売のほうは、中国銀貨と麝香をインドに持ってゆき、インドから煙草を麗江に運びました。下察隅へも行ったことがあります。

中村：奴隸についてお話しただけででしょうか。

老人：インドへ行くとき奴隸を使いました。全部

チベット族の奴隸です。

永井：楽しかったこと、辛かったことを覚えていきますか。

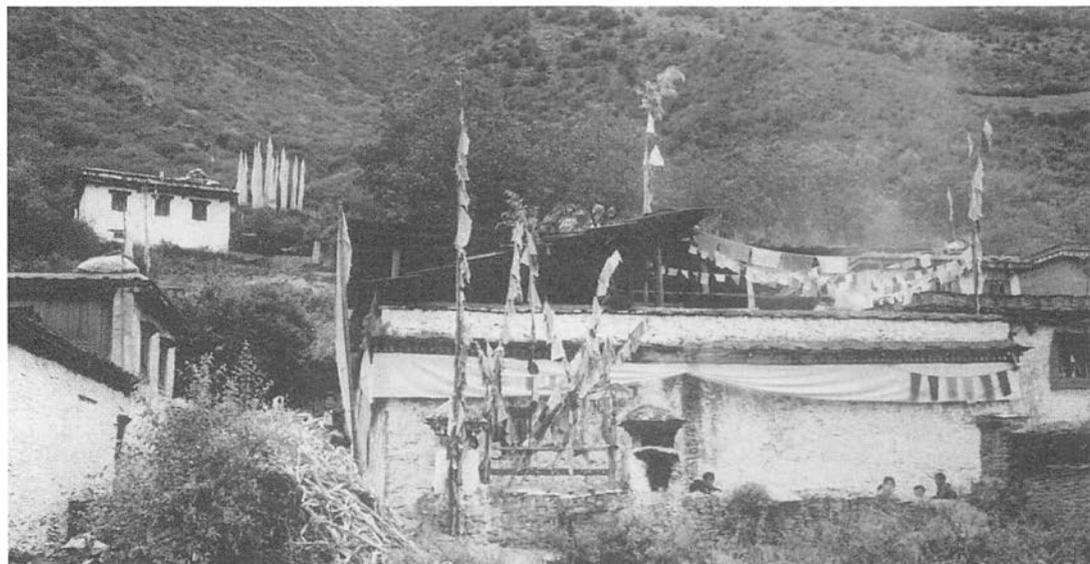
老人：もう目も見えず、耳も遠くなりました。楽しかったことは五台山とインドへの巡礼です。嫌なことは忘れてしまいました。好きな食べ物はツェンパです。

口当たりのいいチンコー酒を綺麗なお孫さんにすすめられるままに飲みふらふらになる。帰る途中、ラマ僧院に立ち寄る。カム地方の他の土地と比べると貧弱な寺である。ベイリーが来たときは63人のラマがいたが、今は1人だけである。2002年に3人のアメリカ人が門空に來たが、それ以前に外国人が來たかどうか誰も知らない。日本人としては我々が初めてである。

開発の槌音、そして巡礼の年

10月21日、午前8時 15℃。暖かくて清々しい朝だ。温暖の地であることを実感する。天気は安定している。朝は曇っているが、やがて晴れてくる。決まったパターンである。が、梅里雪山の最高峰、カ格博6,740mの西面は雲がへばりついていて見えない。

泊まった家の主、息子と親戚の男が馬方として同行してくれる。荷物が減ったので騾馬7頭で出発する。村人が見送ってくれる。「再見」後ろ髪を引かれる思いだ。砂礫と岩の道が一気に怒江に



◀メンコンのラマ僧院

架かる吊り橋(1,920m)に下る。人馬が通れる唯一の橋である。5年まえに増水のため流されて、再建に1年以上かかった。昔はロープ・ブリッジで渡った。騾馬を叱咤しながら怒江左岸の荒々しい急斜面につけられた岩の道を扎那に向かって進む。対岸からは恐ろしく見えるが、昔からの街道、茶馬古道なので道幅はあり整備されている。4時間で昼過ぎに扎那に着く。息子は途中から帰ってしまった。騾馬は馬よりも過酷な使役に堪えられるようだ。

扎那(2,100m)は怒江左岸の段丘上にある交通の要で、玉曲沿いに北上して左貢に至る街道と、我々が来た察隅への街道の分岐点である。現在は察隅県察瓦龍郷の行政の中心である。私にとっては1996年の梅里雪山巡礼路一周のとき以来である。7年前は粗末な郷政府の役所、小さなラマ寺と村の民家があっただけで、私は村外れでキャンプした。今は急速に街造りが進んでいる。埃っぽくてアメリカの西部開拓時代の趣さを感じさせる。街道の両側にレストラン、宿泊所、売店が並び、病院もできている。中国政府の西部大開発の波は陸の孤島にもおよんでいる。急激な変貌振りに戸惑いさを感じる。ときおり発破の音が峡谷をこだまする。怒江下流の雲南省・貢山県の丙中洛から川藏公路の左貢県扎玉まで、怒江・玉曲沿いの自動車道路建設が始まっている。文字通り深い浸食の国を縦断する計画である。丙中洛から扎那まですでに3分の2が完成しているという。

扎那から馬で丙中洛までは4日、扎玉までは7日かかる。我々は怒江を下り、丙中洛まで行くことを第一案に考えていたが、道路工事のため危険で馬のキャラバンは到底通れないことが分かった。第二案の塩井に出る以外に選択肢はない。馬方も同調してくれたので馬を替える必要はない。北へ向かう左貢・塩井への街道に行くことにする。

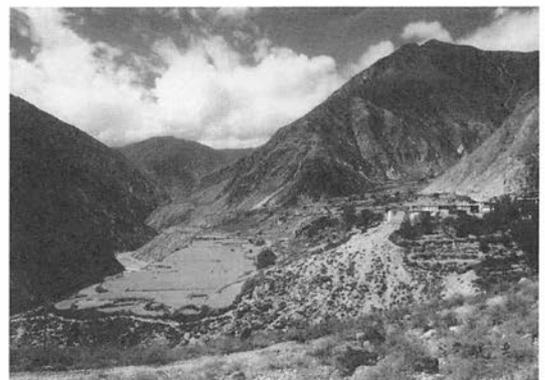
梅里雪山一周の巡礼が続々と南からやってくる。巡礼のことをチベット語で「グラ」という。外国人はなぜか“Kora”と書く。徳欽からメコンを下り、聖山ドケ・ラを越えてやってくる。扎那は巡礼にとっても家路につく分岐点である。八宿方面へ帰る巡礼は察隅への道を往く。昌都や遠く青海省へ帰る巡礼は玉曲・左貢を経由する。四川の

▼ノ・ラ(4,269m)梅里雪山一周の巡礼



巴塘方面は塩井でメコンを渡る。徳欽へは雪拉(4,815m)を越え梅里石に下る。巡礼の夥しい数に驚く。巡礼は1996年より一桁多い。理由は、梅里雪山の聖なる山「カ格博」の干支が羊で、今年は未年であり、12年に一度のお目でたい年だからである。

老若男女、貴貧を問わない。一人からたくさんの馬を使う数十人のグループまでいる。着飾った娘さん、ダンディーなカンパの伊達男から、乞食のようにみすばらしい連中まで多種多様である。赤ん坊を負ったお母さんもいる。賑やかである。宗教的な厳粛さは感じられない。彼らにとって年一回のリクリエーションのようだ。チンコー酒を飲み陽気に旅を楽しんでいる。私は1996年に扎那から格布まで歩いているのでこの区間はよく覚えている。夕方、龍普村(2,490m)に着いて民家に泊まる。前回は外の水場の近くにテントを張った。村人が出てきて踊りをして歓迎してくれた。素朴な出迎えに心が和んだ。1993年にはニコラス・クリンチさんもここでキャンプしている。



▲ザナン村とサルウィン川(怒江)



今は巡礼が泊まるための簡易テントが張られている。売店までできていてカップ・ヌードルもおかれている。村人は巡礼相手に商売をしている。巡礼路の標識まで立っている。扎那の開発にともない物資の輸送が増えている。すべて塩井から馬で運ばれる。20-30頭単位の馬の隊商が頻繁にくる。キャラバンのすれ違いがたいへんである。崖の狭い悪路で渋滞を起し、馬が暴れると危険きわまりない。峠が雪で閉ざされるまえに荷物を運ぶ。辺境は活気に溢れている。

カ格博峰西面の氷河へ入るには龍普からのヤク道に行く。友人のニュージーランド山岳会の会長、ジョン・ナンカビス一行と扎那か龍普で会うことを期待していたが駄目だった。2日遅れで梅里雪山巡礼路を来たことが、帰国後ジョンからの11月24日のEメールで分かった。

「トム、(イラワジ川源流行は)素晴らしい旅でしたね。おめでとう。我々は10月23-24日に扎那にいました。あなたに会えればよかったと思いますが、すれ違いはよく起きることです。我々は龍普から支谷に入りましたが、巡礼路と同じように楽しい旅でした。カ格博西面の偵察のために行ったではありません。遠くから見ましたが、カ格博の近くまでは行きませんでした。蘭州氷河研究

所の地図(中村註: 1/50,000の梅里雪山の地図、日本でも手に入る)に出ているカ格博から西に延びる尾根上のブンシュン・ラカ(5,877m)の東の低いピークを登っただけでした。残念だったのは、巡礼たちが道の上に残してゆく夥しいゴミの量です。今年は吉兆の年なので例年より多くの巡礼が来たので仕方がなかったのかもしれませんが。……ジョン」ニュージーランド人やオーストラリア人は環境保全にはとりわけ厳しい。

梅里雪山の東面とメコンの谷はシャングリラの名前で観光地化しているが、チベット自治区側の西面は殆ど人が入っていない。西面の氷河に入ったのは京都大学学士山岳会の写真家・小林尚礼さんだけである。1991年の京大・中国日中合同登山隊の雪崩による大量遭難時の遺体が明永氷河で発見されるたびに、小林さんは回収と処理のために徳欽に通いつけている。17名のうち未回収の遺体は2003年末で一体だけとなった。

玉曲から塩井へー旅の終わり

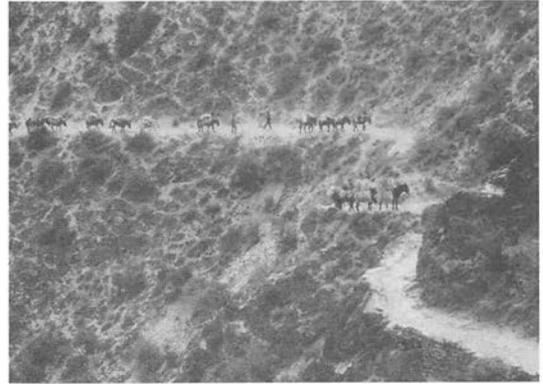
10月22日、龍普を出発、巡礼と前後してトンディ・ラ(3,352m)に向かう。松茸が自生する青崗木(栲の一種)は大きくなり、サルオガセがまとわりつき、苔まではえている。谷底が乾燥していて、

上にゆくにしたいが湿潤になり植生が豊かになるというキングドン・ウォードの観察を裏付ける。女性として初めてラサに到達したアレキサンドラ・D・ニールも1922年12月にトンディ・ラを越えている。色とりどりの旗を結んだ竹竿を杖にして、巡礼が相次いで登ってゆく。上品な老年夫婦が互いに労わりながら行く姿には畏敬の念を感じる。青海省から来たという。上り下りのきつい道を野宿しながら往復3ヶ月かけて歩く。日本の四国巡礼と比べていかに過酷な旅か。トンディ・ラは満艦飾のラテ(経文の布)が所狭しとはためいている。

峠から針葉樹の原生林を下る。樹林帯の急坂は日本の南アルプスに似ている。暫くすると開けて耕地にでる。周囲の黄色く色づいた紅葉が美しい。北に玉曲の流れが見える。小春日和のような日溜りの斜面で昼食にする。陳さんは時間の許すかぎり、昼飯をコックの阿松さんにしっかり作らせる。最低でも湯を沸かしお茶をいれ、インスタント・ラーメンを作る。この日は雲南ハム、ジャガイモの混ぜご飯を炊く。なかなかいける。阿松さんが作る夕食の定番は、高圧釜で炊いたご飯、米は最上級の黒龍江省米(日本の米と変わらないショート・グレイン)。雲南ハムや缶詰の肉とキャベツ、白菜、瓜、ジャガイモなどの野菜炒め。卵か野菜スープ。朝は粥である。昼食のため小麦粉で作ったチベットパンを泊まった家で焼いてもらう。飽きがこない。鶏が手に入るところでは買って料理する。これらに日本から持参した嗜好品、例えばカレーや缶詰、佃煮が加わるので、食事の不満はなかった。なんといっても高圧釜が威力を発揮した。

玉曲めがけて下ってゆくとループ状の屈曲部が眼下にひろがる。山腹の岩壁が荒々しく薙ぎおち、豪壮なゴルジュをつくっている。青い急流が蛇行している。急斜面に一条の茶馬古道が延びている。河岸の段丘で生活を営む村落の胡桃の木が彩りを添える。深い浸食の国で最も魅力的で印象深い自然の驚異である。キングドン・ウォードが「チベットの神秘の川」と表現しているのが玉曲のS字状の流れである。北から南に流れてきた玉曲は上記の屈曲部で北に180度流を変え、再び屈曲して南

▼札那から塩井への隊商



に向かい門空の少し上流で怒江に注ぐ。

10月23日、格布(2,460m)を早立ちする。泊まったところは廃屋のような民家だった。虫に食われ痒くて夜中になんどか目を覚ましたので眠い。格布から尾根の一角にある峠(2,840m)に上がると、道は格布拉貢(4,100m)、雪拉(4,815m)を越えて徳欽に通じる道と左貢にでる街道に分かれる。左貢への道を辿る。玉曲の300mほど上の山腹をほぼ水平に北に行く。S字状の中間点である尾根の鞍部から両側に同じ川が逆の方向に流れているのを見て、キングドン・ウォードは感嘆した。その鞍部が東側の対岸に見える。ウオボという村(2,730m)で昼食、玉曲の北の屈曲部に近いラドウン(2,880m)の民家に泊まる。長い行程であった。晴れて木孔雪山の東面が見えた筈だ。が、キャラバン中は雲に蔽われていた。

10月24日、暗い内に一人で起きて眺望のいいところに上り日の出を待つ。運がよかった。雲海の上に現れた主峰と第2峰に朝日が当たるチャンスを掴むことができた。ごく短い時間だった。すぐ



▲息をのむ玉曲の大峡谷、深い浸食の国

▼格布付近の玉曲の流れ



▼梅里雪山一周巡礼、碧土にて



▼メコン川河岸の塩の井戸、塩井



▲塩井のラゴン僧院

雲にかくれてしまった。秘峰の貴重な写真を撮れて満足する。S字状の西側の分水嶺、トン・ラ(3,270m)を越えて玉曲の河床まで下り、橋を渡って左岸に移る。玉曲に架かる木の橋は東チベット特有の「片持ち橋」(カンティレバー・ブリッジ)である。続々と巡礼のグループが列をなして橋を渡る。対岸の平地が昼食の場所で賑やかである。我々も中に入って休む。青い清流、段丘、森林が調和している美しい峡谷である。道は左岸沿いに続き、午後早く碧土(3,170m)に着く。

ここの陸の孤島でキングドン・ウォードの探検の基地になった。ツァワロンの豊かな土地という先入観が強かったが、想像とは少し違っている。村落の規模は門空ほど大きくない。が、畑は緑で蔽われている。村の中心にメインストリートがあるのは碧土だけだ。往来が多い交易路の駅通としての役割を担ってきた歴史を感じる。巡礼が売店に群がっている。大きな僧院の廃墟がある。文革かそれ以前に放棄されたのだろう。政府関係の新しい建物もできている。陳さんが宿を探したがすべて断られる。仕方なしに村外れにあるゴミだらけの巡礼のキャンプ地にテントを張る。ジョン・ナンカピスでなくても平気でゴミを捨てる習慣には眉をひそめなくなる。

10月25日、巡礼たちの朝は早い。我々も明るくなったばかりの7時半に碧土を出発する。長く続いた好天も終わる。碧土から30分ほどで左貢への街道から分かれて塩井への道に入る。サルウィン・メコン分水嶺のベダ・ラ(4,540m)を越える。樹林帯をひたむきに登る。驛馬は強い。昼頃から雪が降り始め、峠を越えるころは吹雪になる。ベダ・ラは広々とした峠である。ベイリーの記述を引用しよう。

「ベダ・ラは12月から3月まで雪のため閉鎖される。その間は西にあるもう一つの峠、ディ・ラが使われる。ディ・ラを越える道はダユール(中村註：扎玉)に通じる。1882年にA-K(クリシュナ)が訪れた要衝の場所である。」1998年の11月20日に永井さんと私は塩井からディ・ラ(4,581m)を越えた。そのときベダ・ラはすっかり雪に閉ざされていた。ベイリーの話しを続ける。「(我々は碧土から上ってきた)道は縦の木の森林を通る。

大きな木は地上4フィートのところで周囲が11フィートある。我々は碧土のラマ僧院で一晩泊まった。50人のラマ僧がいた。フランス人探検家、バコーが2、3年まえに来て良い印象を残している。土地の人たちにとって外国人は単に“外国人”で、英国人もフランス人も区別はない。最初訪れた外国人の良いか悪いかの印象は容易には変わらない。我々はバコーの通ったところでは暖かく迎えられた。ラマ僧の1人は私がブーツを脱ぐのを手伝ってくれた。エドガーの伝道所では考えられないことだと彼は言った。」

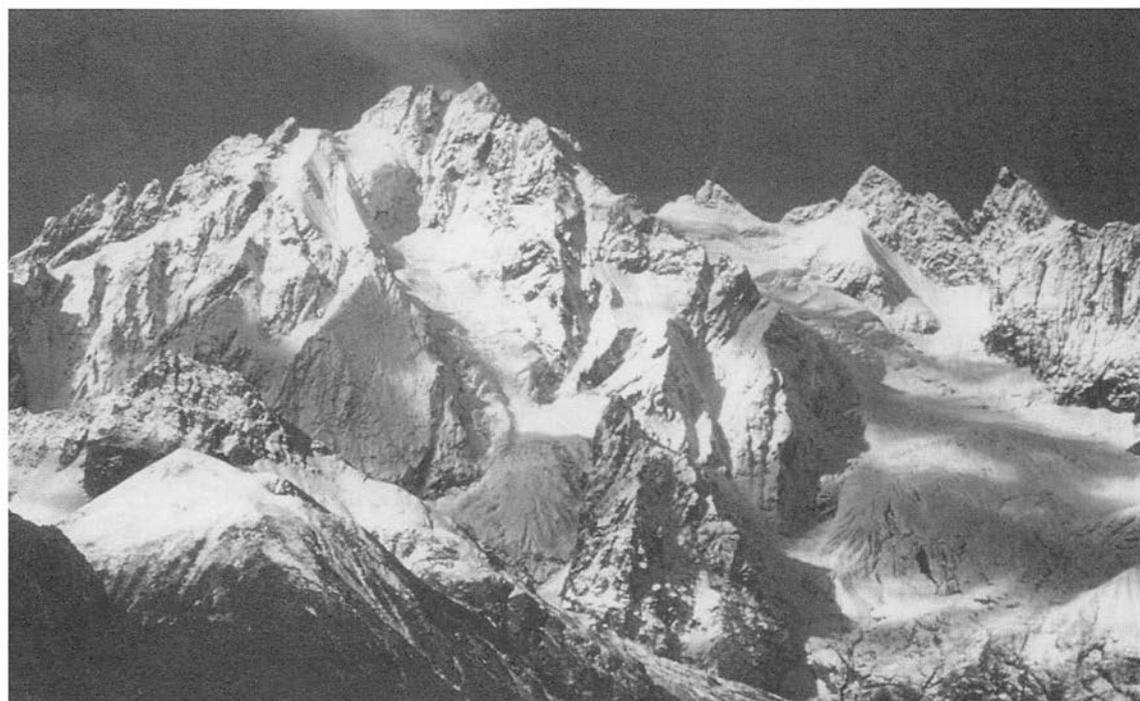
この日は沖曲(2,880m)の民家で泊まる。陳さんが豪勢な火鍋を作ってくれる。鶏2羽、湯葉、春雨、茸、人参、ジャガイモに特製のタレを使ったご馳走である。チンコー酒でキャラバン最後の夜を盛り上げる。沖曲から谷沿いに下れば、天津市の援助で建設されたメコン川のほとりに松達水力発電所があり、そこから沖曲に送電されている。

10月26日、小雨の中をラゴン僧院(3,480m)に上り塩井(2,700m)に下る。ラゴン僧院はメコン川(2,400m)と塩井を直下に見下ろす尾根の鞍部にある。大きな僧院である。現在は70人のラマ僧がお勤めをしている。ここもチベットの勢力と中

国との攻防の場所であった。ラゴン僧院は1907年に中国人によって破壊され、多くのラマ僧が殺された。1911年にベイリーとエドガーが来たときは廃墟になっており、中国の兵隊に占領されていた。政府の行政官はいなかった。雲の切れ目にメコン川の蛇行、兩岸の塩の井戸、段丘上の塩井の村が遥か下に見える。一気に駆け下り、メコンのほとりの甲達(2,440m)に着く。1998年に世話になった馬方の家を訪ねる。よく覚えていてくれて懐かしく迎えてくれる。首尾よく念願の旅が完結した。塩井の街も建設ラッシュで急速に変わりつつある。後は車で帰路につくだけである。

最後にキングドン・ウォードの未知の彼方への想いを引用し、探検史紀行の締めくくりとしたい。

「塩井から北西に旅すれば、どちらを向いても高く聳える氷雪の峰々と対面するだろう。そこは遥かイラワジ川源流の彼方まで果てしなくひろがる未踏の領域であり、植物学者にとっては無垢の楽園である。」(*From China to Khamti Long* London 1924)



▲メコン、揚子江分水嶺、白芒雪山のツェラチョニ峰(5,429m)東面

マカルー入山者

[1969-2001=33年間]

(注) 派遣母体後ろの()内は登山隊員+報道隊員等であるが、学術隊員、医師などは登山隊員とした。氏名の×印は、その登山で死亡したものの。

[1] 1969年春・調査 [ネパール側]

日本山岳会東海支部(5)

隊長：松浦正司(28)／隊員：尾崎祐一(29)、生田浩(23)、小川務(24)、山田勇(25)

[南東稜のサウス・コル(6,600m)上まで偵察]

[2] 1970年春 [ネパール側]

日本山岳会東海支部()

現地隊長：原真(33)／隊員：市川章弘(33)、田中元(32)、尾崎祐一(30)、松浦正司(29)、尾上昇(26)、川口洋之介(26)、後藤敏宏(26)、吉原正勝(26)、長谷川勝(26)、橋本篤孝(25)、越山将男(24)、生田浩(24)、浅見正夫(21)、中世古直子(32)、芦谷洋子(25)、白籬史朗(36)／報道：谷久光(36)

[南東稜の初登攀に挑戦。5月23日19時10分、尾崎、田中が初登攀に成功した。最終キャンプに帰幕したのは、翌日午前3時20分。]

[3] 1982年秋 [ネパール側]

山学同志会(5)

隊長：湯田一男(34)／隊員：石橋真(30)、久保田克(28)、小野村一博(24)、道脇幸博(25)

[マカルー・ラ右のリブから北西稜を登り、9月30日、湯田、石橋、道脇の3名が激しいブリザードの中、無酸素登頂に成功した。]

[4] 1983年秋 [ネパール側]

ベルニナ山岳会(4)

隊長：福島正明(32)／隊員：土屋博(36)、齊藤人氏(21)、今村裕隆(24)

[高所ポーターを使用せず、北西稜から登頂を目指したが6,200mで登頂を断念した。]

[5] 1986年冬 [ネパール側]

電々山岳同志会(7)

隊長：馬場博行(37)／隊員：西村秋二(34)、鮑本徹(35)、長嶋治(31)、中野恵造(21)、高木寛(29)、園田道子(33)

[冬期登頂を目指してマカルー・ラの上のリブに入ったが、北西稜直下7,520mで断念した。]

[6] 1986年冬 [ネパール側]

カモシカ同人(2)

隊長：山田昇(36)／隊員：斎藤安平(33)

[南東稜からの冬期登頂を目指して入山。アルパイン・スタイルで登攀したが、悪天候のためブラック・ジャンダルム7,500mで断念した]

[7] 1990年春 [ネパール側]

高山研究所(2)

隊長：原真(53)／隊員：大西宏(28)

[ポーランド女性ワンダ・ルトケヴィッチら二人と合同を組んで北西稜に入山。5月6日大西がHAPのニマと登頂に成功した。]

[8] 1990年秋 [ネパール側]

昭和山岳会(2)

隊長：島方健次(42)／隊員：藤田信二(33)

[南東峰南西バットレスからの登頂を目指して入山したが、11月8日、7,050mで断念した。]

[9] 1990年秋 [ネパール側]

隊長：渡辺和文(30)単独

[単独で北西面に挑戦。フランス、アメリカ隊も入山。10月8日、7,900mで断念した。]

[10] 1991年秋 [ネパール側]

ベルニナ山岳会(6)

隊長：今村裕隆(32)／隊員：長尾妙子(35)、二俣勇司(36)、岡田勇孝(34)、×石坂工(26)、野沢井歩(26)

[通常ルートからの登頂を目指して入山。10月5日、今村、二俣、岡田が登頂に成功。7日、長尾が無酸素で登頂し、同時に登頂した石坂と二人は帰途8,200mでビバークとなった。翌日も8,000m付近で別々にビバークとなり、9日、長尾が固定ロープで死亡している石坂を発見した。]

[11] 1992年秋 [ネパール側]

雪豹クラブ(4)

隊長：岡田貞夫(43)／隊員：村口徳行(37)、山

本修(31)、石川一郎(30)

[通常ルートからの登頂を目指して入山。10月1日、8,300mまで到達したが深雪のため断念]

[12] 1995年春 [中国側]

日本山岳会 (14+ 2 =16)

隊長：重廣恒夫(49)／隊員：山本宗彦(35)、渡辺雄二(44)、馬場博行(47)、山本篤(31)、谷川太郎(27)、岡本憲(26)、松原尚之(30)、小野岳(34)、田辺治(34)、荒井俊彦(23)、竹内洋岳(24)、志賀尚子(29)、田久和義隆(33)／報道：迫田泰敏(49)、宮坂永史(30)

北側から初めての挑戦。東稜の初登頂を目指して入山。7,200m付近から東稜を離れて北面大プラトーに入り、最後は通常ルートと合流して5月21日、山本篤、田辺、松原、荒井が登頂に成功。22日にも山本宗、小野、谷川、竹内も登頂した。]

[13] 1996年秋 [ネパール側]

日本登攀クラブ(3)

隊長：山野井泰史(31)／隊員：山野井妙子(40)、報道：青田浩(38)

[山野井泰史が単独で西壁からの登頂を目指したが7,200mで断念した。]

[14] 1998年秋 [ネパール側]

苦楽無山童子(2)

隊長：橋本久(45)／隊員：上野幸人(44)

[通常ルートからの登頂を目指して入山。10月3日、7,800mまで到達したが断念した。]

[15] 1998年秋 [ネパール側]

埼玉県山岳連盟(7)

隊長：福田靖(42)／隊員：加藤富之(39)、小沢直宏(44)、町田伸一(42)、井上仁(42)、成田大介(22)、

[通常ルートからの登頂を目指して入山。10月1日、8,100mまで到達したが断念した。]

[16] 2001年春 [ネパール側]

国際公募登山隊(1)

参加者：尾崎隆(48)

[ガイドとして参加し通常ルートから5月12日登頂に成功した。]

20世紀日本人マカルー登頂者リスト

	氏名	生年月日	登頂年月日	年令
01	田中 元	1937. 1. 1	1970. 5.23	33★
02	尾崎 祐一	1939. 1.12	1970. 5.23	31★
03	×石橋 真	1952. 7.29	1982. 9.30	30●
04	湯田 一男	1948. 8. 5	1982. 9.30	34●
05	道脇 幸博	1957. 2.20	1982. 9.30	25●
06	×大西 宏	1962. 5.14	1990. 5. 7	27
07	岡田 勇孝	1957. 6.25	1991.10. 5	34
08	今村 裕隆	1959. 4. 1	1991.10. 5	32
09	×二俣 勇司	1955. 6.28	1991.10. 5	36
10	長尾 妙子	1956. 3.19	1991.10. 7	35●
11	石坂 工	1965. 6.28	1991.10. 7	26
12	田辺 治	1961. 1. 4	1995. 5.21	34
13	山本 篤	1962.10. 7	1995. 5.21	31
14	松原 尚之	1965. 3. 1	1995. 5.21	30
15	荒井 俊彦	1971.11. 7	1995. 5.21	23
16	山本 宗彦	1959.12. 7	1995. 5.22	35
17	谷川 太郎	1967. 6.27	1995. 5.22	27
18	小野 岳	1960. 7.20	1995. 5.22	34
19	竹内 洋岳	1971. 1. 8	1995. 5.22	24
20	尾崎 隆	1952. 9. 9	2001. 5.12	48

(注) ★印は日本人初登頂、●印は無酸素。

20世紀日本人ヤルン・カン等登頂者リスト

	氏名	生年月日	登頂年月日	年令
01	八嶋 寛	1950. 3.10	1981. 5. 9	31Y
02	×角田 不二	1952. 9.10	1981. 5. 9	28Y
03	尾形 好雄	1948. 7. 2	1981. 5. 9	32Y
04	八木原罔明	1946.11.27	1981. 5. 9	34Y
05	飛田 和夫	1946. 1. 5	1981. 5. 9	35Y
06	磯野 剛太	1954. 1.24	1984. 5.17	30C
07	大谷 亮	1959. 9.14	1984. 5.17	24C
08	三谷統一郎	1958. 3.30	1984. 5.18	26C
09	和田 城志	1949.10.16	1984. 5.18	34C
10	重廣 恒夫	1947.10.11	1984. 5.18	36C
11	和田 城志	1949.10.16	1984. 5.18	34S
12	三谷統一郎	1958. 3.30	1984. 5.18	26S
13	重廣 恒夫	1947.10.11	1984. 5.18	36S

(注) Y=ヤルン・カン、C=カンチェンジュンガ中央峰、S=カンチェンジュンガ南峰。

地域ニュース

《中国》

エヴェレストで遭難

ガイド付き公募登山隊に参加してチョモランマ(8,848m)に北稜から挑戦していた、大田祥子隊員(63)は、5月20日、参加したアトベンチャーガイズの近藤謙司隊長(42)、高橋和夫隊員(47)と登頂に成功したが、下山途中、第二ステップ付近の標高8,500m地点で固定ロープにぶら下がった状態で動かなくなり死亡した。遺体は現場に残された。大田祥子隊員は、登頂時63歳と80日であり、渡辺玉枝の63歳と176日に次ぐ世界最高峰女性高齢記録であった。

エヴェレストのガイド付き公募登山隊での事故は、1996年5月、難波康子が南東稜から登頂後、サウス・コルで疲労凍死している。8年後に再び起こったこの遭難は、まさに「天災は忘れた頃にやって来る」との教訓を思い起こさせるものである。尚、北稜からは、20日に河野千鶴子(57)、久松眞記子(54)の2名、23日に倉岡裕之、斎藤鐘吉、田村俊子の3名が登頂した。

青天の霹靂

今年も世界最高峰は大賑わいである。昨年の初登頂50周年のような世間一般の騒ぎは無いにしろ、南北ベースキャンプは相変わらずの盛況のようだ。既に5月18日現在100名を越える登頂者が出たとの情報もある。

ところが、この状況に大いに迷惑している人達がいる。北壁ダイレクト(ホーンバインクーロワール左手岩壁)に挑戦している強力なロシア隊のメンバーが、大混雑のノーマルルートから投げ捨てられた?カラの酸素ボンベが飛んできて2度も危険な目にあつたと報告をしており、今後登る人間に注意するようにとインターネット上で呼びかけている。彼等は既に8,200mを越えてルート工作をしており、8,400mにファイナルキャンプを置いてからアタックする予定だ。(中川)

トピックス

金(ゴールデン)のピトン

アメリカの雑誌「クライミング」は、著名なアルパインクライマーのマイケル・ケネディ氏が創刊、初代編集長を勤めたことで有名であり、日本国内でも購読者が多い。H A J会員の中にも多数居られるとおもう。このクライミング誌が何年前からかは忘れたが、「ゴールデン・ピトン賞」というものを始めた。以前に紹介したフランスのピオレ・ドール(黄金のピッケル賞)をもじった事は間違いない。もともと、誌上で年間のベストクライミングなどの成果を評価して発表していたものが賞になった。

4月号で2003年の受賞者が発表された。アルパインクライミング、ビッグ・ウォール・フリークライミング、スポーツクライミング、スポーツ・ミックス、コンペティション・クライミング、高所登山、トラディショナル・ロック、ボルダリング、オールラウンド、サービス、ライフタイム、アチーブメントと多岐にわたる。この賞のユニークなところは、ベストクライミングが、カテゴリーに分けられている事であり、一つのクライミングではなく、クライマーなどの個人の活動をトータルに評価するという点だ。平山ユージは昨年のベスト・オールラウンド・クライマーとなった。もちろん、平山の受賞はこれが初めてではない。

アルパインクライミングでは、冬季にモンブランのブレイヤード山稜からフレネイ岩稜までの間に有る16ルートを22日間で登り続けた、パトリック・ベアハルトとフィリップ・マーゲンが受賞した。

高所登山ではヌプツェ(7,861m)ノースバットレスをアルパイン・スタイルで登ったウィリーとダミアンのベネガス兄弟が受賞した。このルートは1979年にダグ・スコットらによって登られた北稜の下部バリエーションで、より困難な岩稜を6日間で攀じた。ババノフ=コシュレンコのヌプツェ東峰初登頂は、固定ロープを用いた事を理由に選外となった。このほかにも「サービス(政治的活動)」とか「永年の成果(ライフタイム・アチーブ

メント)」なんていうのもあり、評価の幅が広い。選考基準は編集者の独断と偏見による。

ピッケルとピトンのほかにも、昨年あたりから黄金にあやかった賞が出現している。日本でも「黄金のわらじ」賞なんてやったら、楽しめると思う。ちょっと主旨が違ってしまうかも知れないけれど。(中川)

理事会報告

H A J 理事会が下記のとおり開催された。

記

日 時：平成16年 5月15日(土)10時半～11時半

場 所：本会事務所

出席者：本人出席：山森欣一、八木原圀明、尾形好雄、中川裕、林雅樹、睦好正治(以上本人出席6名)、大内倫文、名塚秀二、岩崎洋、古関正雄、田辺治、名越實(以上委任状提出者6名)。理事数13、定足数は9名。よって理事会は成立した。

オブザーバー：酒井國光(会長)

理事会次第

- 1) 総会提出の議案を承認。15年度入会者を承認。
- 2) 日常業務処理のため、特に定めるもの以外については、権限を常務理事会へ委任することに決定。(常務理事会構成は、理事長、常務理事)

第23回海外登山遭難対策研修会のご案内

日本山岳協会主催の標題の研修会が下記のとおり開催される。

記

日 時：平成16年 6月19日(土)～20日(日)

19日：13時半受付 14時開会

場 所：長野県松本市・松本青年の家

参加費：6千円

内 容：高所における血栓症(K2/ガッシャーブルムI)

特別上映 [氷河の山旅] (1958年ジュガール・ヒマラヤ探査隊の記録)

他

問い合わせ先：日山協事務局

TEL：03-3481-2396、FAX:03-3481-2395

どうしたらヒマラヤの山に登れますか？

京都府山岳連盟主催の情報交換会が下記のとおり開催される。

記

日 時：平成16年 7月10日(土)～11日(日)

19日 13時受付 13時半開会

場 所：京都薬科大学蓬菜セミナーハウス

J R 湖西線蓬菜駅下車、国道161号線を南に徒歩約10分

参加費：6月24日まで振り込み分は8千円(学生は7千円)、6月25日以降7月1日までは8,500円(学生は8千円)7月1日必着。(参加費には宿泊代・夕朝食代・資料代が含まれています。但し、宿泊の方は別途、懇親会費1,500円を当日徴収します)

一日のみ参加＝6月24日まで3千円(学生2千円。25日以降＝3,500円(学生2,500円)会場の都合により完全予約制です。

一日参加にも申し込みが必要です。

申し込み方法：郵便振替にてお申し込み下さい。振替番号 0108-5-19150 加入者名・京都府山岳連盟 通信欄に「海外登山交流会参加費」と記入下さい。申し込み用紙は下記へ。〒601-8047京都市南区東九条下殿田町70京都府スポーツセンター内 京都府山岳連盟事務所 TEL&FAX 075-692-3490

内 容：(10日) シシャパンマ中央峰登頂(2003年) 冬期ローツェ南壁(2003年)、チョー・オユー登頂(2003年) (11日) ヒマラヤ入門(林雅樹) 学生ペアのヒマラヤ登山あれこれ(仏教大学OB) ルオニイ(平井一正)

東京集会のお知らせ

日時 6月28日(月)午後7時～
内容 八千メートル峰登頂者の山岳遭難
場所 H A J ルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分) 又は、J R 大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

エヴェレスト高齡登頂トップ37

(2004年5月31日現在)

山森欣一調べ

(注) 氏名の前の×は死亡者。備考のローマ数字は八千メートル峰通算登頂回数。

番号	氏名	生年月日	登頂年月日	年 齢	ル ー ト	備 考
1	三浦雄一郎	1932. 10.	2003. 5. 22	70歳	222日	南東稜 世界最高齡登頂者。II
2	石川 富康	1936. 11.	2002. 5. 17	65歳	243日	北 稜 2度目登頂・南北登頂。VII
3	山本 俊雄	1936. 7.	2000. 5. 19	63歳	311日	北 稜 II
4	渡邊 玉枝	1938. 11.	2002. 5. 16	63歳	176日	南東稜 世界女性最高齡登頂者。V
5	×大田 祥子	1941. 3.	2004. 5. 20	63歳	80日	北 稜 下山中、約8,500m付近。II
6	今野 一也	1939. 4.	2000. 5. 19	61歳	43日	北 稜
7	河野千鶴子	1946. 10.	2004. 5. 20	57歳	226日	北 稜 II
8	川原 慶紀	1940. 11.	1998. 5. 20	57歳	182日	北 稜 II
9	石川 富康	1936. 11.	1994. 5. 12	57歳	171日	南 稜 バリエーション・ルート。VI
10	安村 淳	1946. 8.	2003. 5. 21	56歳	270日	北 稜 III
11	近藤 和美	1941. 11.	1998. 5. 22	56歳	181日	北 稜 VII
12	泉田 清幸	1948. 3.	2003. 5. 22	55歳	55日	北 稜
13	田中 基喜	1948. 7.	2003. 5. 22	54歳	299日	北 稜 1971マナスル西稜初登攀。II
14	宮崎 勉	1947. 11.	2002. 5. 17	54歳	187日	北 稜 1978ダウラギリI初登攀。VII
15	野口 光二	1947. 11.	2002. 5. 25	54歳	185日	北 稜 II
16	久松眞記子		2004. 5. 20	54歳		北 稜
17	荒木富美雄	1949. 9.	2003. 5. 21	53歳	241日	北 稜 II
18	保坂 昭憲	1948. 2.	2000. 5. 17	52歳	91日	北 稜 II
19	佐藤 信二	1950. 7.	2002. 5. 25	51歳	327日	北 稜 II
20	山下 健夫	1949. 1.	2000. 5. 19	51歳	136日	北 稜
21	八嶋 寛	1950. 3.	2000. 5. 17	50歳	68日	北 稜 1981ヤルン・カン日本初登。II
22	斎藤 鐘吉		2004. 5. 23	49歳		北 稜 II
23	江崎 幸一	1952. 3.	2000. 5. 17	48歳	52日	北 稜
24	村口 德行	1956. 5.	2004. 5. 24	47歳	362日	南東稜 4度目登頂。IV
25	小野寺 斉	1950. 9.	1998. 5. 19	47歳	238日	北 稜
26	高橋 和夫	1957. 2.	2004. 5. 20	47歳	101日	北 稜 II
27	×難波 康子	1949. 2.	1996. 5. 10	47歳	93日	南東稜 下山中、サウス・コルで死亡。
28	阿久津悦夫	1938. 8.	1985. 10. 30	47歳	78日	南東稜 帰路南東稜上でピバーク。
29	村口 德行	1956. 5.	2003. 5. 22	46歳	359日	南東稜 3度目登頂。III
30	村口 德行	1956. 5.	2002. 5. 16	45歳	353日	南東稜 2度目登頂・南北登頂。II
31	中村 省爾	1942. 5.	1988. 5. 5	45歳	343日	北 稜 1977年K2第二登。II
32	小林 重一	1954. 9.	2000. 5. 19	45歳	238日	北 稜
33	橋本 久	1952. 10.	1998. 5. 18	45歳	204日	北 稜
34	矢野 利明	1952. 11.	1988. 5. 20	45歳	200日	北 稜 II
35	尾形 好雄	1948. 7.	1993. 12. 22	45歳	173日	南西壁 1981ヤルン・カン日本初登。V
36	田中 敏雄	1955. 8.	2000. 5. 19	44歳	276日	北 稜 II
37	佐藤 賢	1953. 9.	1998. 5. 18	44歳	256日	北 稜

平成16年

日本ヒマラヤ協会通常総会報告

日時 平成16年5月15日(土)13時~14時15分
場所 東京、東池袋 かんぽヘルスプラザ東京
出席者 本人出席：酒井國光(会長)、山森欣一、
八木原聡明、尾形好雄、中川裕、林雅樹、
睦好正治(以上理事)、中岡久(以上監
事)、天城敏彦、中村正勝、鈴木正典
(以上評議員)、坂口三郎、早川和子(以
上栃木)、飛田和夫、寺沢玲子(以上埼
玉)、京極紳、小室豊、鈴木雄一、出口
當、森山安次(以上東京)、江藤公(愛
知)、以上本人出席21名、委任状提出者2
48名、合計出席者269名。定足数は会員
数679名の三分の一227名。よって総会は
成立。

総会次第

1) 中川裕常務理事の司会で定刻開会。総会に先
立ち昨年遭難死亡した高橋敏雄、野沢井歩両会
員に黙祷を捧げ、酒井國光会長から挨拶を戴い
た後、定款の規定では議長は理事長であるが、
理事長が各議案説明に当たるため、出席者同意
の上、議長席に八木原聡明常務理事が着席。議
事録署名人に天城敏彦、森山安次両会員を選ん
で議事に入った。

2) 議事

議案第1号から第4号について別紙のとおり山
森理事長から説明がなされて全て満場一致で承
認された。理事会報告があり、平成16年総会を
終了した。

平成15年度 事業報告書

自 平成15年4月1日

至 平成16年3月31日

I. 定款第4条第1項にもとづく事業(ヒマラヤに
関する総合的な資料と情報の収集・整理・保存
及び、それらの利用希望者に対する便宜供与)

1. 情報管理事業

1) 会員内外に対する情報提供とトレッキング・

踏査・登山計画の企画・研究等の指導年間
50件を越す電話・FAXによる照会と30件
を越える事務所への来訪者へ情報提供と指
導を実施した。

2) 文献・資料のシファレンスサービス

一般的に入手しづらいものに限定してサー
ビスを実施した。ヒマラヤ諸国の登山規則・
地図・登山記録・登頂者記録等に関する希
望者が多い。

2. ヒマラヤ登山情報管理機構(センター)設立 事業

21世紀を展望して登山4団体(日山協、労
山、JAC、HAJ)が平成10年3月に合意
した「海外登山情報センター」構想の進展が
見られないため、これを打開する方法について
関係者と協議した。

3. 登山調査用紙の統一について

ヒマラヤ登山を取り巻く環境の変化に伴い、
登山隊の情報が掴みづらくなっている。その現
状を改革し、登山の結果を後世に残すために、
現在各団体が個別に実施している「登山調査
用紙」と提出先を統一するために、本会が提
案して日山協、労山、JAC、HKTの5団
体で協議・機関決定を行い、平成16年3月31
日記者発表を行った。

II. 定款第4条第2項にもとづく事業(登山をはじ めとする野外活動と関連する諸分野に関する研究 活動と成果の公表)

1. 調査研究事業

1) 高所登山における事故防止に関する調査 研究

ヒマラヤ登山における日本隊の死亡遭難
事故は、1968年から36年間連続して発生し
ており、これをストップさせるため、事故の
実態をまとめ関係する会議で公表すると共に
事故例について解説した。しかし、2003年は
標高六千メートル以上の峰の死亡事故は、

ネパールで冬1件、秋2件、夏のカラコルムで1件発生し、4名が死亡した。

2) 高所登山に対する意識調査

実施しなかった。

3) 山岳の自然を汚染しないで実施する登山・踏査活動の研究

本会が主催する「新日本ヒマラヤ会議」他、関係する会議で「テイクイン、テイクアウト」について啓蒙した。

2. 出版事業（研究報告）

1) アルタイ山脈登山隊(99年) 報告書発行準備を行った。

2) 日本隊ヒマラヤ登山50年の記録の発刊準備を行った。

3) 神々の座「八千メートル峰データ(20世紀版)」の発行準備を行った。

4) 仮称「日本ヒマラヤニスト名鑑」の発行のため「ヒマラヤ」誌上に連載を開始した。

3. 関連学術事業

興味ある地域への派遣について研究した。

III. 定款第4条第3項にもとづく事業（ヒマラヤへの登山をはじめとする野外活動・研究・調査等の団体の派遣）

1. 高所登山事業

1) サマー・キャンプ「パス（7,478m）登山隊」の派遣

当初計画の山はチベットのカンベンチン(7,281m)であったが、4月下旬に発生したSARSでチベットが入域禁止となり、隊員の総意でパキスタン、パス（7,478m）に舞台を替えて実施。7月20日～8月25日に酒井國光隊長以下9名を派遣した。登山隊は8月18日、東峰(7,295m)に佐藤英樹副隊長ら7名が登頂に成功したが、下山中の20日、5,500m付近のクレバスに高橋敏雄隊員が転落。翌日、夕刻6時頃救出したが直後に死亡した。遺体は、後日派遣した岩崎、寺沢の収容隊によって収容され、ラワルピンディでご家族立ち会いの下、ダビに付された。

2) チベット「ラシャール偵察隊」の派遣

中国からの許可が降りず延期した。

3) 直轄プロジェクトの推進

イ) 平成16年度サマー・キャンプ登山

夏の登山実施に向けて募集したが、応募者がなく派遣を断念した。

ロ) 平成16年度「シシャパンマ(8,027m)新ルート登山」

新ルートからの登頂の可能性を求めて隊員募集に着手したが翌年度に延期した。

ハ) 平成17年度「サマー・キャンプ登山」

ニンチン・カンサ(7,206m)、カンベンチン(7,281m)、スパンティーク(7,027m)、各峰の隊員募集に着手した。

ニ) H A Jとして未着手の天山山脈登山隊派遣準備。

4) 登山許可申請と取得

ヒマラヤ高所登山分野での現状を分析しつつ、ヒマラヤ登山の大衆化の分野の声に応えると共に、未知と困難への挑戦の育成を視野に入れ、魅力ある高峰について各国へ登山許可申請と打診を行った。

2. 野外活動事業

1) 日本ヒマラヤ協会創立40周年記念トレッキング隊を、カイラスに派遣するための予行として、ニンチン・カンサトレッキングを募集したが、応募者がすくなく延期した。

2) ヒマラヤ各国の魅力ある地域への踏査・トレッキング隊の派遣について企画準備を行った。

IV. 定款第4条第4項にもとづく事業（機関誌、その他の刊行物、登山・野外活動、研修、各種会合によるこの分野の健全な発達を図るための指導・啓蒙活動）

1. 機関誌発行事業

「ヒマラヤ377号～388号」を毎月発行した。

2. 出版事業

「パキスタン登山の手引き」発行準備を行った。

3. 指導・啓蒙事業

1) 第1回新日本ヒマラヤ会議（東京）の開催
本会がこれまで開催してきた三つの「インド・ヒマラヤ会議」、「中国登山研究会」、「高所登山事故と環境対策研修会」を統合して、新たに「新日本ヒマラヤ会議」を発足させた。第1回を平成16年1月25日（日）

に東京「労働スクエア東京」で開催した。
参加者74名。

2) 地域ヒマラヤ集会の開催

11月8日(土) 関西集会を林雅樹理事、
大西保、樋上嘉秀両評議員協力の下、大阪
「セルロイド会館」にて開催。参加者46名。

3) 定例会

毎月東京ルームで開催した。

4) 壮行会

7月5日パサー隊を東京で開催。計画の
発表と情報の伝達。(54名)

5) H A J 華甲望年会

12月13日東京で開催。パサー隊の登山報
告と本年中に還暦を迎えた会員6名を祝い、
行く年を惜しみ来る年を語った。(55名)

V. 定款第4条第5項にもとづく事業(その他前
条の目的を達成するために必要と認める事業)

1. 国際交流事業

1) 外国代表の招請

実施しなかった。

2) 代表の派遣

実施しなかった。

3) 各ヒマラヤ諸国の関係者との交流

イ) ネパールNMA代表団歓迎会(12月)

2. 国内関係団体との協調

1) 労山幹事で、日山協、J A Cと「登山4
団体三役懇談会」を行い情報交換と協議を
行った。(7月)

2) 本会が呼び掛けて「海外登山調査用紙の
統一」について、4団体+H K Tで協議し
「高峰登山計画書」と「高峰登山報告書」
の用紙を統一し、合意事項を確定し、提出
先の統一を実現した。

3) その他、山岳3団体等と協力・情報交換
を行った。

3. 組織の整備

1) ホームページ開設の検討。

4. パサー登山隊遭難事故関係

1) ご家族の現地入り、遭難報告、葬儀関係、
保険金請求関係について関係者の協力の下、
随時処理した。

2) 高橋敏雄隊員の遺体収容隊の派遣につい

て、岩崎洋登攀隊長と寺沢玲子会員を派遣
し、日・パトラベルの全面的な協力を得て収
容・ダビを行った。また、収容具について都
岳連救助隊、金子秀一氏にお世話になった。

5. その他

1) 野沢井歩専務理事遭難関係

10月2日、ヒムルン・ヒマールで雪崩のた
め死亡したため、派遣母体のバーバリアンク
ラブの事故処理に全面的に協力した。また、
バーバリアンクラブ、都岳連、立正大学Ⅱ
部W V部O B会と本会の共同による「合同
追悼会」について協力した。

2) 「イエティ捜索隊2003」への協力

八木原暁明常務理事が参加したイエティ捜
索隊について事務局として協力した。

平成15年度収支決算書

自 平成15年4月1日

至 平成16年3月31日

I. 一般会計

(収入の部)

(単位：円)

勘定科目		予算額	決算額	増・減(△)
大科目	中科目			
入会金収入		(300,000)	(100,000)	(△200,000)
	入会金収入	300,000	100,000	△200,000
会費収入		(8,000,000)	(5,691,200)	(△2,308,800)
	通常会員会費	5,000,000	4,641,200	△358,800
	終身会員会費	3,000,000	1,050,000	△1,950,000
事業収入		(8,800,000)	(8,081,061)	(△718,939)
	野外活動事業	0	0	0
	高所登山事業	6,750,000	6,035,350	△714,650
	指導啓蒙事業	100,000	216,000	116,000
	機関誌発行事業	600,000	790,171	190,171
	出版事業	250,000	251,540	1,540
	国際交流事業	100,000	0	△100,000
	その他事業	1,000,000	788,000	△212,000
雑収入		(300,000)	(1,996,201)	(1,696,201)
	雑収入	300,000	1,996,201	1,696,201
保険金		(0)	(5,603,431)	(5,603,431)
	パサー隊	0	5,603,431	5,603,431
前期繰越		(△12,051,312)	(△12,051,312)	(0)
	前期繰越	△12,051,312	△12,051,312	0
合計		5,348,688	9,420,581	4,071,893

(支出の部)

(単位：円)

勘定科目		予算額	決算額	増・減(△)
大科目	中科目			
管理費		(8,200,000)	(8,087,906)	(△112,094)
	給料手当	5,000,000	5,000,000	0
	通信運搬費	250,000	249,568	△432
	電話費	150,000	152,216	2,216
	消耗品文具費	50,000	49,588	△412
	宮繕備品費	0	0	0
	印刷製本費	550,000	470,930	△79,070
	図書費	50,000	51,900	1,900
	賃借料	1,720,000	1,719,900	△100
	光熱水費	150,000	105,304	△44,696
	会議費	30,000	30,240	240
	広報費	200,000	238,140	38,140
	雑費	50,000	20,120	△29,880
事業費		(8,600,000)	(7,386,030)	(△1,213,970)
	野外活動費	0	0	0
	高所登山事業	5,000,000	3,936,219	△1,063,781
	指導啓蒙事業	50,000	95,383	45,383
	機関誌発行費	2,800,000	2,644,313	△155,687
	出版事業費	0	0	0
	国際交流事業	50,000	13,440	△36,560
	その他事業	700,000	696,675	△3,325
事故処理		(0)	(3,327,462)	(3,327,462)
	バスター隊		3,327,462	3,327,462
次期繰越		(△11,451,312)	(△9,380,817)	(△2,070,495)
	次期繰越	△11,451,312	△9,380,817	△2,070,495
合計		5,348,688	9,420,581	4,071,893

平成16年度事業計画書

自 平成16年4月1日

至 平成17年3月31日

I. 定款第4条第1項にもとづく事業(ヒマラヤに関する総合的な資料と情報の収集・整理・保存及びこれらの利用希望者に対する便宜供与)

1. 情報管理事業

- 1) 会員内外に対する情報提供とトレッキング・踏査・登山計画の企画・研究等の指導。
- 2) 文献・資料のレファレンスサービス

2. ヒマラヤ登山情報管理機構設立事業

21世紀を展望して登山4団体(日山協、労山、JAC、HAJ)が平成10年3月に合意した「海外登山情報センター」の早期設立に

II. 財産目録

(平成16年3月31日現在、単位：円)

種別	摘要	金額
1. 現金	手許現金	(56,840) 56,840
2. 普通預金	みずほ銀行高田馬場支店 No.1099791 東京三菱銀行新宿支店 No.4455421	(1,473,681) 1,418,196 55,485
3. 郵便振替	00100-6-48954	(148,662) 148,662
4. 備品	事務所備品	(450,000) 450,000
5. 登山装備	中国・デポ 事務所・デポ	(700,000) 500,000 200,000
資産合計		2,829,183
6. 未払金	柴田金之助	(100,000) 100,000
7. 預かり金	新年度入会者4名分	(60,000) (60,000)
8. 前受金	森山ら登山隊分	(1,200,000) 1,200,000
9. 借入金	柴田金之助 植松秀之 小島守夫 稲田定重 山森欣一	(10,850,000) 2,000,000 600,000 500,000 5,000,000 2,750,000
負債合計		12,210,000
差し引き正味財産		△9,380,817

向けて積極的に取り組む。

3. 高峰登山計画書と高峰登山報告書の周知徹底啓蒙事業

平成16年3月に登山4団体+HK T(ヒンズークシュ・カラコルム会議)が合意して統一した「高峰登山計画書」と「高峰登山報告書」の周知徹底を計り、登山界での早期定着を目指す。

II. 定款第4条第2項にもとづく事業(登山をはじめとする野外活動と関連する諸分野に関する研究活動と成果の公表)

1. 調査研究事業

- 1) 高所登山における事故防止に関する調査研究
- 2) 高所登山に対する意識調査

- 3) 山岳の自然を汚染しないで実施する登山・踏査活動の研究
2. 出版事業(研究報告)
 - 1) アルタイ登山隊報告書の発行
 - 2) パスー登山隊報告書の発行
 - 3) 神々の座「8000m 峰のデータ(20世紀版)の発行
 - 4) 日本隊ヒマラヤ登山50年の記録の発行
 - 5) 仮称「日本ヒマラヤニスト名鑑」の発行準備
3. 関連学術事業

興味ある地域への派遣準備
- III. 定款第4条第3項にもとづく事業(ヒマラヤへの登山をはじめとする野外活動・研究・調査等の団体の派遣)
 1. 高所登山事業
 - 1) 直轄プロジェクトの推進
 - イ) 平成17年度「シシャパンマ(8,027m)新ルート登山」
 - ロ) 平成17年度サマー・キャブ「ニンチン・カンサ(7,206m)登山」
 - ハ) 平成17年度サマー・キャンプ「スパンティーク(7,027m)登山」
 - ニ) 平成17年度サマー・キャンプ「カンベンチン(7,281m)登山」
 - ホ) 平成17年度「ラシャル」偵察登山
 - ヘ) H A Jとして未着手の天山山脈登山隊派遣準備
 - 2) 登山許可申請と取得

ヒマラヤ高所登山分野での現状を分析しつつ、ヒマラヤ登山の大衆化の分野の声に応えると共に、未知と困難への挑戦の育成を視野に入れ、魅力ある高峰について各国へ登山許可申請を行う。
 2. 野外活動事業
 - 1) 日本ヒマラヤ協会創立40周年に実施する予定のカイラス・トレッキングの予行のために、当面ニンチン・カンサトレッキングを毎年実施する予定であったが、2年連続して成立しなかったことを踏まえて、17年度からカイラス・トレッキングに着手する。
 - 2) ヒマラヤ各国の魅力ある地域への踏査・トレッキング隊の派遣準備を行う。
- IV. 定款第4条第4項にもとづく事業(機関誌、その他の刊行物、登山・野外活動、研修、各種会合によるこの分野の健全な発達を図るための指導・啓蒙活動)
 1. 機関誌発行事業

「ヒマラヤ389号～400号」の発行。
 2. 指導・啓蒙事業
 - 1) 第2回新日本ヒマラヤ会議の開催

平成17年1月30日(日)国立オリンピック記念青少年総合センターで開催。
 - 2) 地域ヒマラヤ集会の開催

各評議員と協議し条件が整い次第随時開催。
 - 3) 定例会

毎月東京で開催。
 - 4) H A J 華甲望年会

12月11日(土)東京で開催。本年中に還暦を迎える会員を祝い、行く年を惜しみ来る年を語る。
- V. 定款第4条第5項にもとづく事業(その他前条の目的を達成するために必要と認める事業)
 1. 国際交流事業
 - 1) 外国代表の招請

必要に応じて随時招請する。
 - 2) 代表の派遣

必要に応じて随時派遣する。
 - 3) 各ヒマラヤ諸国の関係者との交流

来日したヒマラヤ登山関係者等と随時懇談。
 2. 国内関係団体との協調
 - 1) 本会幹事で、定着した日山協、労山、J A Cと「山岳4団体三役懇談会」を行行情報交換と協議を行う。(7月9日)
 - 2) 山岳4団体で「海外登山情報センター」について協議、実現を模索する。
 - 3) 山岳4団体で「登山共済」について協議・実現を模索する。
 - 4) その他、山岳関係団体等と協力・情報交換を行う。
 3. 組織の整備
 - 1) 執行体制の強化
 - イ) 年後の役員改選期を目途に役員・評議員の若返りを考慮する。

ロ) 本部近郊会員の協力を得て、非常勤スタッフを育成する。

2) 会員拡大の強化

イ) 一般会員の新規加入の一大キャンペーンの推進。

ロ) 終身会員への移行を推進。

3) パソコン活用の推進。

4) 機関誌「ヒマラヤ」の紙面強化の手法について検討する。

4. パスー峰遭難事故関係

1) 家族のBC付近訪問団を派遣する。期間は8月9日～23日。団長：酒井國光以下4～5名。

2) 高橋敏雄遺稿追悼集の発刊に協力する。

5. その他

野沢井歩前専務理事の遺稿追悼集発刊に協力する。

平成16年度評議員名簿

(任期：平成16年度まで)

[評議員]

佐藤 英 樹 (56) 北海道
 辻野 治子 (47) 〃
 松 館 正義 (60) 青 森
 丸 山 芳雄 (65) 秋 田
 菅 原 和明 (48) 山 形
 志小田 美弘 (45) 宮 城
 小 島 守夫 (64) 栃 木
 長 繁 夫 (53) 〃
 糸 川 章 (52) 〃
 後藤 文 明 (39) 群 馬
 天 城 敏彦 (57) 東 京
 青 木 茂 (49) 山 梨
 西 嶋 鍊太郎 (61) 石 川
 中 村 正勝 (59) 長 野
 鈴 木 正典 (42) 京 都

(P23へ続く)

平成16年度収支予算書

自 平成16年4月1日
 至 平成17年3月31日

I. 一般会計

(収入の部)

(単位：円)

勘定科目		予算額	前年度予算額	増・減(△)
大科目	中科目			
入会金収入		(300,000)	(300,000)	(0)
	入会金収入	300,000	300,000	0
会費収入		(8,000,000)	(8,000,000)	(0)
	通常会員会費	5,000,000	5,000,000	0
	終身会員会費	3,000,000	3,000,000	0
事業収入		(1,980,000)	(8,800,000)	(△6,820,000)
	野外活動事業	0	0	0
	高所登山事業	0	6,750,000	△6,750,000
	指導啓蒙事業	100,000	100,000	0
	機関誌発行事業	630,000	600,000	30,000
	出版事業	250,000	250,000	0
	国際交流事業	0	100,000	△100,000
	その他事業	1,000,000	1,000,000	0
雑収入		(300,000)	(300,000)	(0)
	雑収入	300,000	300,000	0
前期繰越		(△9,380,817)	(△12,051,312)	(△2,670,495)
	前期繰越	△9,380,817	△12,051,312	△2,670,495
合 計		1,199,183	5,348,688	△4,149,505

(支出の部)

(単位：円)

勘定科目		予算額	前年度予算額	増・減(△)
大科目	中科目			
管理費		(8,530,000)	(8,200,000)	(330,000)
	給料手当	5,000,000	5,000,000	0
	通信運搬費	250,000	250,000	0
	電話費	150,000	150,000	0
	消耗品文具費	50,000	50,000	0
	管轄備品費	0	0	0
	印刷製本費	750,000	550,000	200,000
	図書費	50,000	50,000	0
	賃借料	1,900,000	1,720,000	180,000
	光熱水費	100,000	150,000	△50,000
	会議費	30,000	30,000	0
	広報費	200,000	200,000	0
	雑費	50,000	50,000	0
事業費		(3,600,000)	(8,600,000)	(△5,000,000)
	野外活動費	0	0	0
	高所登山事業	0	5,000,000	△5,000,000
	指導啓蒙事業	50,000	50,000	0
	機関誌発行費	2,800,000	2,800,000	0
	出版事業費	0	0	0
	国際交流事業	50,000	50,000	0
	その他事業	700,000	700,000	0
次期繰越		(△10,930,817)	(△11,451,312)	(△520,495)
	次期繰越	△10,930,817	△11,451,312	△520,495
合 計		1,199,183	5,348,688	4,149,505

平成16年度役員等名簿

(任期：平成16年度まで)

都道府県別会員数

(平成16年5月15日現在)

[顧問]	柴田 金之助 (82)	岐阜	北海道	50(7)[14]	50(7)[14]	和歌山	2(0)[0]	
	古原 和美 (81)	長野	青森	7(3)[0]		奈良	2(1)[0]	
	遠藤 登 (73)	東京	秋田	8(1)[0]		滋賀	4(0)[1]	
	稲田 定重 (63)	福島	岩手	6(1)[1]		京都	13(6)[2]	
[会長]	酒井 國光 (65)	茨城	宮城	9(6)[2]		大阪	21(3)[1]	
[理事長]	山森 欣一 (60)	東京	山形	16(4)[0]		兵庫	16(1)[1]	58(10)[5]
[常務理事]			福島	21(10)[2]	67(25)[5]	岡山	5(1)[0]	
	八木原 罔明 (57)	群馬	栃木	24(5)[3]		広島	12(6)[2]	
	尾形 好雄 (55)	東京	群馬	30(17)[7]		鳥取	6(0)[2]	
	名塚 秀二 (49)	群馬	茨城	12(4)[0]		山口	6(3)[2]	
	岩崎 洋 (44)	愛媛	埼玉	53(15)[10]		香川	3(1)[0]	
	中川 裕 (43)	東京	千葉	24(7)[3]		愛媛	3(3)[1]	
	田辺 治 (43)	愛知	神奈川	52(9)[10]	195(57)[33]	高知	5(2)[0]	
	古関 正雄 (43)	神奈川	東京	137(37)[23]	143(37)[27]	島根	0	
	林 雅樹 (40)	京都	山梨	9(3)[0]		徳島	0	40(16)[7]
	睦好 正治 (37)	東京	新潟	3(0)[0]		福岡	21(5)[0]	
[理事]	大内 倫文 (56)	北海道	富山	6(1)[0]		佐賀	1(1)[0]	
	戸谷 薫 (56)	〃	福井	3(0)[0]		大分	0	
	名越 實 (55)	広島	石川	6(3)[0]		長崎	5(2)[0]	
[監事]			長野	20(5)[1]	47(12)[1]	熊本	4(0)[0]	
	保坂 昭憲 (56)	福島	静岡	6(0)[1]		宮崎	1(0)[0]	
	中岡 久 (54)	埼玉	愛知	24(3)[1]		鹿児島	1(0)[0]	
[評議員] (P22より続く)			岐阜	7(2)[1]		沖縄	0	33(8)[0]
	大西 保 (62)	大阪	三重	4(0)[0]	41(5)[3]	国外会員	5(1)[3]	5(1)[3]
	樋上 嘉秀 (59)	大阪	* ()内は終身会員 []内は女性会員。			総計	679(178)[98]	
	今村 裕隆 (45)	山口	* 夫婦会員は36組 (その内19組は終身会員)。			(前年度)	702(176)[95]	
	国沢 鎮雄 (75)	高知						
	下田 泰義 (53)	長崎						
	大住 恵子 (46)	在パキスタン						

(評議員21名の平均年齢=54.1歳)

会費納入のお願い

本会の会費は毎年3月末日までに前払いで納入をお願いしております。未納の方は1万円を郵便振替用紙にて下記へ納入下さい。

00100-6-48954 日本ヒマラヤ協会

H A J 販売書籍案内

書 名	価 格	送 料
1. 雪の住処35年の記録 (H A J 創立35周年記念誌)	3, 5 0 0 円	(4 5 0 円)
2. 天壇の山に挑む (ミニヤ・コンカ1991年隊)	2, 5 0 0 円	(3 1 0 円)
3. 秀麗ヌン峰を攀じる (1991年隊)	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
4. 千人の悪魔の峰、マモストーン・カンリ (1984年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
5. 烈風の彼方へ、冬期マナスル (1982年隊)	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
6. ナンダ・カート (1981年隊事故報告)	2, 0 0 0 円	(3 4 0 円)
7. 聖地巡礼の旅 (サトバント1990年隊)	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
8. “神の河” ブラマプトラの激流を下る (1990～1991年)	2, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
9. 麗しき四川の夏 雪宝頂登頂 (1991年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
10. 東部カラコルム	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
11. ナマステ、サラスワティ (1992年隊)	2, 0 0 0 円	(3 1 0 円)
12. 崑崙の頂を踏む、青海・玉珠峰 (1993年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
13. 天女の山 (玉虚峰) (1994年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
14. ヒマラヤ、そして仲間達へ (ケダルナート・ドーム1980年隊)	1, 5 0 0 円	(3 1 0 円)
15. ルンボ・カンリ (1994年隊)	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
16. 中国登山の手引き (第5版)	3, 0 0 0 円	(3 4 0 円)
17. ニンチン・カンサ (1997年隊)	1, 6 0 0 円	(2 1 0 円)

■ 寸 感 ■

チョモランマで「ガイド付公募登山隊」に参加した女性が登頂後遭難死亡した。構図は1996年南東稜で起きた難波康子さんの遭難と酷似している。死亡した大田祥子さんは、出発時の朝日新聞のインタビューに「年齢的に最後のチャンス。自分の限界に挑戦したい」と語っている。事故の詳細はまだ伝わって来ないが、本人が内科医であること、63歳という年齢、登山経験の浅さなど、今後の参考となるような報告が当事者から早期に出されることを望みたい。「高所遠足」で最高峰を楽しみたいと考えている人は大勢いる。 (山森)

事 務 局 日 誌 (5 月)

- 11日 (火) ヒマラヤ391号発送
 パスー峰BC訪問団について関係者へ通知
 14日 (金) ニンチン・カンサトレッキング中止
 について関係者へ通知
 15日 (土) H A J 理事会 (於：ルーム)

H A J 通常会員総会 (於：かんぼヘルスプラザ東京21名)

- 17日 (月) 山岳4団体三役懇談会開催通知発送
 25日 (火) コピー機入れ替え (東京リコー)
 28日 (金) 登山医学研究会幹事会 (於：東京女子医大、山森)
 29日 (土) 山岳文化学会総会 (於：慈恵会医科大学、酒井、山森)
 31日 (月) 東京集会 (16名)

ヒマラヤ No.392 (7月号)

平成16年6月10日印刷 16年7月1日発行
 発行人 山森欣一
 編集人 山森欣一
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
 萬栄ビル501号
 電話 03-3988-8474
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

遙かなる高みへ



トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～

◆格安航空券のご相談は◆

キャラバンデスク

(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本 社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1 岩波書店アネックス5F ☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396

■大阪営業所/〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

お問い合せ・お申し込みフリーダイヤル ☎0120-811395 (通話料無料) をご利用下さい。

株式会社 **西遊旅行**

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員
西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

東京新聞の山岳書

東京新聞出版局
中日新聞東京本社

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-1-4 日比谷中目ビル6F
[TEL] 03-3595-4830 (代) [FAX] 03-3595-4831
<http://www.tokyo-np.co.jp/tbook/>
※定価額に消費税も含まれています。

<p>山書散策</p> <p>河村正之 著</p> <p>1,575円</p>	<p>登山の運動生理学百科</p> <p>山本正嘉 著</p> <p>2,100円</p>	<p>女性ガイドのしなやか登山術</p> <p>樋口英子 著</p> <p>1,575円</p>	<p>新・山の雑学ノート・第1集</p> <p>岳人編集部 編</p> <p>1,470円</p>	<p>中高年の雪山入門</p> <p>福島正明 著</p> <p>1,680円</p>	<p>すぐ役立つ山のメモ帖</p> <p>岳人編集部 編</p> <p>1,470円</p>	<p>チャレンジ！アルパインクライミング</p> <p>〔南アルプス・八ヶ岳・谷川岳編〕 廣川健太郎 著</p> <p>2,625円</p>	<p>チャレンジ！アルパインクライミング</p> <p>〔北アルプス編〕 廣川健太郎 著</p> <p>2,625円</p>	<p>山小屋の主人の炉端話</p> <p>工藤隆雄 著</p> <p>1,575円</p>	<p>ベシック・フリークライミング</p> <p>菊地敏之 著</p> <p>1,785円</p>	<p>最新クライミング技術</p> <p>菊地敏之 著</p> <p>1,680円</p>
--	--	---	--	--	---	---	---	--	--	--

フリークライミングがシルヒッチ、アルパイン、ビッグウォールまで全てのロッククライマーへの、実践的な最新技術書。つひつこの技術を、単なるマニュアルとしてではなく、その意味や選択基準までを含め解説。

新しい生涯スポーツとしてあらゆる世代に爆発的な人気のフリークライミングを、ムーブの作り方、ロープワーク、自然壁の登り方、スキルアップのしかたや取り組など必要不可欠な多項目にわたって、ビジュアルにわかりやすく、かつ理論的に解説。ジムからはじめてアウトドアを目指すすべてのクライマーのための教則本の決定版。

著名な山小屋の主人たちが活の登山者に炉端で語る人話の取っ手と題してお話。

北アルプス全域を代表するアルトを、分かりやすくカラー写真で解説したルート案内書。夏の岩壁、雪壁のバリエーションルートに加え、これまでほとんど紹介されていない冬期岩壁登攀ルートを巻末で紹介。

上巻の北アルプス編に続いて、南アルプス・八ヶ岳、谷川岳などから、日本を代表するアルパインクライミングルート20本を、写真を豊富に使ってわかりやすく解説したルートガイドの決定版。

登山の実践から環境問題、山の文化誌にいたるまでさまざまな話題を提供。

低山から夢のヒマラヤまで、トランブルを未然に防ぎ、白銀の大自然を満喫しながら雪山歩きを楽しむ。

山での話題が登った山の数だけではない。豊富な雑学が登山をより楽しく、より安全にしてくれる。

常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば山はもっとと楽になる。呼びかける女性登山ガイドのユニークな登山講座。

アッという間に合理的で安全な登山ができるのか。ヒマラヤなど高所登山実績を踏まえて、分かりやすくまとめた。

今まで数多く発刊された山書。何を読んだらよいか。そんな時の指針として――「岳人」連載時から好評。

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

ICI本店	〒169-0073	東京都新宿区百人町2-1-2	03-3208-6601	新潟とやの店	〒950-0982	新潟県新潟市堀之内南1-16-52	025-241-5134
新宿西口店	〒160-0023	東京都新宿区西新宿1-16-7	03-3346-0301	仙台店	〒983-0852	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8	022-297-2442
神田登山店	〒101-0051	東京都千代田区神田神保町1-6-1 (タキビル2F)	03-3295-0622	秋田広小路店	〒010-0001	秋田県秋田市中通1-4-5	018-884-1771
神田本館	〒101-0051	東京都千代田区神田小川町3-10	03-3295-3215	盛岡大通店	〒020-0022	岩手県盛岡市大通1-10-16	019-626-2122
八王子店	〒192-0081	東京都八王子市横山町3-12	0426-46-5211	札幌店	〒060-0062	北海道札幌市中央区南二条西4-8	011-222-3535
大宮店	〒330-0802	埼玉県さいたま市大宮区宮町1-37	048-641-5707	北十二条店	〒001-0012	北海道札幌市北区北十二条西3-5	011-747-3062
高崎店	〒370-0831	群馬県高崎市新町5-3	027-327-2397	伏古店	〒007-0861	北海道札幌市東区伏古一条4-1-45	011-787-0233
川越店	〒350-0045	埼玉県川越市南通町14-4	0492-26-6751	大阪ミナミ店	〒556-0005	大阪府大阪市浪速区日本橋4-9-17	06-6636-2470
甲府店	〒400-0814	山梨県甲府市上阿原町481-1	055-221-0141	神戸三宮店	〒650-0021	兵庫県神戸市中央区三宮町1-3-10	078-335-0355
宇都宮今泉店	〒321-0962	栃木県宇都宮市今泉町1560	028-639-9650	外商部 (メールオーダー係)	〒169-0073	東京都新宿区百人町2-1-2	03-3200-7219
太田高林店	〒373-0825	群馬県太田市高林東町1386	0276-38-0620				
松本店	〒390-0874	長野県松本市大手3-4-24	0263-36-3039				
長野店	〒380-0825	長野県長野市末広町1356	026-229-7739				
茅野駅前店	〒391-0001	長野県茅野市茅野3502-1	0266-82-8510				
新潟店	〒950-0087	新潟県新潟市東大通2-5-1	025-243-6330				



ICI 石井スポーツ